

地理教室の思い出

中村泰三

創立当初

教室創設当初のスタッフ村松、水津、君塚先生また、昭和20年代、30年代にスタッフとなられた渡辺、藪内先生、初期の卒業生の庄野、池野、高木、鈴木、武岡、前田、宮井さんが鬼籍に入ってしまったほど設立当初の時代が昔になってしまった。私が三回生になって演習に出た当時は、教室が市内の明治校舎（元明治小学校）の教室を改造したところにあった。古いが鉄筋の頑丈な造りであったのを覚えている。そこで非常勤講師でこられていた織田、藤岡、森先生などの講義、演習、実習が行われていた。

当時は先生方の独立した研究室はなく、前述の教室を仕切って奥に先生方の机があり、手前に君塚先生が特別注文された巨大な机（当時先生は助手で、雑務を担当しておられた）があり、実習には大変便利であった。この時代は杉本町のキャンパスは米軍に接収されていたので、市内の元小学校を校舎として分散、いわゆる蛸足大学であったので、八幡筋の道仁校舎、鞆の鞆校舎、白髪橋の家政学部校舎（ここの運動場で体育の授業があった）などを行き来していた。

教室は村松先生が学習院から赴任されて設立され、その後川喜田、岩田、水津、君塚、木村先生が着任されて、最後に渡辺先生が私の三回生（昭和28年）のとき関西学院大学から転動してこられた。このように先生方が合計7人で、学生は私の期で5人（地理学教室の一期生は2人、当時の法文学部文学科の定員は60人）であり、演習には先生方全員が出席されたので、学生より先生が多いという誠に贅沢なものであったが、学生の方には大変圧迫感があり、今は懐かしいが、当時は苦になっていた。教室の創立当初なので独自の学風を育てるということで、生活状況は今と違って苦しかったが、先生方は燃えておられ活気があった。地理教室第一回の卒業生杉本、山岸さんは初めから地理が好きで入っておられたが、われわれの回は私を含めてそうでない学生がいたので、教室の空気に馴染むのが大変であった。

卒業式は杉本キャンパスの一部が返還されたので講堂で行われ、大学院の講義、演習も杉本キャンパスで実施されることになった。杉本キャンパスの返還運動は反米斗争の一環として行われ、何が何でも杉本キャンパスを取戻すという取組が進められていた。最終的に返還されたが、当時他にキャンパスを移す（大阪城内という話もきいたが）案もあってどちらがよかったのか分からないところがある。



大学紛争

昭和32年から大阪の市立高校で勤務した後、昭和39年大阪市大文学部の助手となり定年まで勤める

ことになったが、在任中の最も印象に残った時期は、昭和44年の大学紛争時であろう。

地理教室は文学部長に藪内先生、評議員に岩田先生を出していたので一層大変であった。すでに藪内先生が文学部長就任の直前、森川学部長の最後の教授会に文斗委の学生に踏み込まれて徹夜の団交となり、出席教員の一人一人が学生の訊問を受ける状況であった。

研究室は閉鎖され、教授会は外部で行わなければならなくなり、学部の庶務委員は会場の選定に苦労していた。しかも文学部教員の中には文斗委の学生に情報をもらす人がいて、教授会の直前まで会場を知らせないほど警戒していたが、遂に嵐山の花屋敷で開催した教授会が文斗委にもれ、学生に踏み込まれる始末で、会場を大学の教養キャンパスの大教室に移し、延々と長期団交が続けられ、藪内学部長とその他の教員が監禁された。

地理教室としてはできるだけ早く藪内先生に文学部長を辞めてもらうことで一致していたが、この異常事態で藪内先生にドクターストップがかかり、ようやく直木学部長代理に代り、正直いってほっとした。この時先生の御自宅まで先生の必要な品物をとりに参上したことを覚えている。

同年秋警察の介入により封鎖が解かれ、事態は終結に向かったが、教室にはもう一つ大事件が待ち構えていた。つまり村松先生の後任に助手を採用する人事で学生ともめたのである。この件では教室で審議を重ね地理教室の院生も候補者に残っていたが、最終的に自然地理の専門家を入れることになり平野教授を呼ぶことに決まった。しかしこの人事が教授会にかけられて以降、卒業生を押す文学部の一部学生の反対があり、その意向を受けて歴史学教室の主任からも教授会で地理学教室の人事に反対する見解が述べられ、教室は苦境に立った。投票でもう少し反対票が多ければ人事は成立しない、際どい状況で決まったことであった。

この問題について私の立場はきわめて複雑であった。もともと大阪市大の文化系の教授会は民主化が進み、助手を含めた教員全員が出席する教授会になっていて、しかも教授人事の投票権を助手がもっていたので下位のランクの教員の権利が大きかった。したがって、紛争時多くの大学の助手、講師は第三者的立場にあって、時には学生、院生に同調して紛争を楽しんでいてよかったといえるほどであったが、大市大では責任の一端を助手、講師ももっていたので、無責任な行動は許されなかったのである。

この教室の人事は教室のスタッフに再考を促す学生、院生の強い働きかけがあり、私の家にもこれら院、学生諸君が訪れたこともあった。もし私がこの人事に反対に転じたなら教室人事は成立しなくなり、責任をもつ教員が辞めざるを得なくなっていただろう。この時の地理教室の院、学生との団交で今日でいう情報公開、風通しをよくするというので人事もそれに入れることになっていたが、時がたつにつれ風化していった。今日多くの大学で人事の公募が進み、一昔前と比べてその変貌ぶりに感懐を禁じえない。

研究室今昔

文学部では専攻教室間の予算の平等、専門、教養教員の取扱いの平等を初期の教授会で決めていたので、地理学が実験講座になって予算が増加してもそれを教室間で平等に分ける方針をとり、地理学教室の予算獲得のための長年の努力にもかかわらず、私の在任時代は若干の色をつけてもらっただけで過ぎていった（一時認められた時期もあったが）。したがって、予算の割当では非実験教室は有利

であった。

この問題は早くから実験講座扱いであった心理学教室も似た状況であったが、一応実験講座として文学部教授会で認められ、地理学教室より予算が多かった。今日実験講座が増えたが、他大学でも予算の配分に市大文学部と類似した状況に置かれたところが多かったようである。

地理学教室が実験教室になる過程は長く、私の助手時代にも非実験系教室より多くの予算が必要という資料を出し、徐々に器具費その他が、さらに教室スタッフの中で実験予算扱いとなる教員が一人から始まって二人、三人と増え、最後に全員が実験扱いとなった。現在京都女子大に勤務しているが、このような苦勞、心配の全くないところがかつての小教室に属し、大教室より仕事の密度が高く実験扱いになるよう苦闘した時代からみて昔日の感がある。

地理教室の設備や研究室は今日のそれからみて昔を想像するのは難しい。先述のように当初は先生方の机が一か所に置いてあったのであり、その後も相部屋が長年続いた。この状況は文科系の他学部の個室と違って長年文学部につきまとっていた。つまり文部省規準を楯にとる他学部に有利に働いたからである。文学部は教養担当者を多数含んでいて、彼らの文部省規準での設備は専門担当者に比べて少ないことから生じていたことであった。

私が赴任した時、教室でも部屋が不足し（当時5部屋）、村松先生が別格で一人部屋におられたが、他の先生方は相部屋（渡辺、藪内先生と岩田、春日先生がそれぞれ相部屋）で、私は図書室の管理ということでそこに一人いた（残り一室は実習室）。その後平野教授が私に代り、私は藪内先生と相部屋、後に小林先生と相部屋（春日、服部先生が相部屋、平野さんが器具の関係で一部屋）で過し、一人部屋になったのは文学部棟の増築以降、四階から一階に移ってからであった。その後若干の部屋数が増え一室に入ったが、小林先生との相部屋の時期は長く続いた。

定年一年前に線路側に増築された棟に地理学教室が移ることになり、一年間新しい研究室に入れたのは幸運であった。京都大学へ移った石川さんは新棟の建設委員として活躍し、そのため随分時間をとられていたが、完成時京大に移ったため後任の水内先生がその権利をえて、このことを石川さんがぼやいていたことを覚えている。

大阪市大文学部地理学教室は新制大学発足後設立された新しい教室であるが、先生方の研究、教育にかけられた熱意を卒業生の努力により、歴史が新しい割に多くの研究者を輩出してきた。また、高校教員として教育界で活躍した人々も多く（すでに古い卒業生には定年退職しているが）、近年は実業界で働く人が大部分を占めるようになった。最近も高山、杉本さんの業績が朝日、毎日新聞で写真入りで大きく報道され、初期の卒業生が活躍しているのは心強いことである。全国で進められている大学改革により大学が大きく変わりつつあるが、これまで築かれた教室の伝統を受継いで後輩、現役の諸氏がさらなる発展、活躍されることを願っている。

（旧教員・昭和30年卒業・昭和32年修了）